

句集
薔
薇

佐藤尚夫



序

紅梅

平成十二年

〽

十四年

杜若

平成十五年

〽

十七年

黄落

平成十八年

〽

二十年

山茶花

平成二十一年

〽

二十二年

あとがき

序

佐藤尚夫先生の耳鼻咽喉科医院は、金沢市内を流れる犀川から程近い大通りに建っている。医院の入口付近には目が覚めるような薔薇が咲き並び、足を止めて眺める市民も多い。

金沢は、私にとっては第二の故郷である。ここで学生時代を過ごし、仕事で約五年間暮らした。「雉」

創刊主宰の林徹先生は金沢医科大学専門部（金沢

大医学部の前身）出身で、専門は佐藤先生同様、耳鼻咽喉科。佐藤先生はその医局の一年後輩だった。私が「雉」主宰を継ぎ、こうした序文を書かせていただくのも、金沢という懐かしい土地柄と、不思議なご縁のような気がしてならない。

尚夫先生は医局時代、徹先生らと金沢の俳人塩田紅果（「蟻乃塔」主宰）から俳句の手ほどきを受けたそうである。しかし、多忙な勤務医生活をへて、昭和四十年、医院を開業して以来、句作の余裕もなく、診療に追われた。平成七年、医院を長男に任せ、診療も週一回に減らし、ようやくゆとりが出来たという。

この間、徹先生から盛んに俳句を勧められ、平成十年「雉」に入会。毎月三十句を約一年半、ファックスを通じて指導を受ける。十二年から投句を始め、同年四月号で二句が初入選した。

本句集は、初入選の句を含め、七十二歳から八十歳までの約十一年間の句業である。晩学のうえ、句作期間もやや短く、作品の質が心配されたが、一読して全く杞憂に過ぎないことが分かった。これも、徹先生からしつかり基本を習得され、一度の欠詠もなく、句作に打ち込まれたせいと思う。徹先生の俳句作法「主観を抑え、思いを物で表す」「説明や報告を避ける」などを書いた紙を書斎の壁に貼り、句作に励んだそうで、実に感心せざるを得ない。

さて、氏の俳句は徹先生の指導に添い、物に即し、丁寧写生し、なかなか味わい深い。詠まれた対象は、自然の風物から日常身边まで広い範囲にわたる。特に、診療生活、家族関係、句集の題名の「薔薇」を詠んだ句などは大変面白い。

まず、暮しを共にする妻を詠んだ句。

初桜妻即興の琴弾けり

灯を消してながき湯浴みや妻の秋

初霰手押車の妻に跳ね

初音すとあかとき妻に揺すらるる

一句目「初桜」は、琴の巧みな妻が即興の演奏をしてくれた。春の日和に綻び始めた桜が目まぶしい。「灯を消して」は、名月の夜かも知れない。窓から差す月光を浴びながら、妻が湯に浸っている。浴室から湯を浴びる音が絶え間なく続く。幸せそうな「妻の秋」は、幸せな「夫の秋」でもあろう。

「初霰」は歩行が不自由になり、手押車に頼る妻。

雪国金沢の冬の始まりを告げる初談が妻の背中や肩に跳ねる。妻を思う気持ちを感じさせ、生き生きとしたいい作品である。「初音」の句は、明け方、鶯の声を聞いた妻が「ほら、鶯が鳴いてるわよ」と、

寝ている自分の体を揺する。「妻に揺すらるる」に
夫婦の情愛がよく滲み出ている。ほかにも妻を詠
んだ句は数多くあり、胸を打たれた。

赤子の句は、「赤ん坊」と表現して詠んでいる。

紅梅や赤ん坊包み宮参り
掌をひらく赤ん坊木の実降る

一句目は、宮参りに「赤ん坊包み」が、まるで貴
重品扱いでおかしい。「掌（てのひら）をひらく赤
ん坊」も木の実を握っているかのようなのである。

医院経営を長男に任せ、「老医」としての自画像
詠には、しんみりした哀感がこもる。

春愁の眼鏡取替ふ老医かな
春眠をゆるされをりし老医かな
補聴器の耳や秋蚊に襲はるる

一句目「春愁」。視力がまた進み、眼鏡を取替え

る老医のそこはかとなない春 愁の気分を詠む。二句
目。長男に医院を任せた老医だけに、「春眠をゆる
されをりし」の表現は飄逸で面白い。三句目は、
補聴器を掛けた耳を秋蚊が刺す。「何と小癩な」
といった思いだが、妙におかしい。

「老医」ながら、週一回は診察する。

声 嗅 し 女 を 診 る や 春 深 し

急 患 を 診 終 へ て 仰 ぐ 望 の 月

鰯 雲 病 癒 え し と 媪 くる

「声嗅れし」の句。咽喉を痛めた女性を診察する
日々。春は深まり、過ぎて行く。「急患」の句には
「苦痛の中耳炎の患者」の前書き。あわただしい急
患の 治療がようやく終わる。ほっとして空を上げ
ば、十五夜の満月。満ち足りた気分をよく感じさせ
る句である。「鰯雲」の句は、医師としての満足感

を思わせる。老女が「先生、お陰さまで良くなりました」とお礼に訪れる。空に鱗雲が広がり、心まで爽やかな秋晴れである。

尚夫先生は、囲碁、ゴルフと趣味も豊かで、交友関係も広い。

ネクタイを選ぶ初秋の鏡かな
マジックの女医婉然と年忘れ
椎落葉喜寿の一会の集ひかな
沈丁やわが青春の茶房閉づ

「ネクタイ」はおしゃれな先生らしい句。鏡に向かい、ネクタイを次々、胸に当てる姿が目に見える。忘年会は「マジックの女医婉然と」で盛り上がる。三句目「椎落葉」は「一会の集ひ」に高齢の思いが滲む。最後の句「沈丁」には

「歴史六十年の喫茶『ぼたん』」の前書き。筆者も

学生時代、通った懐かしい店。「青春の茶房」の閉店は、甘い沈丁の香りが確かにふさわしい。

本句集には、題名通りの「薔薇」を詠んだ十数句を載せている。薔薇栽培は約十五年。自宅と医院の庭で四季バラを約二十株育て、付近の人にも楽しんでもらえればと、五月から十一月の間、戸外に並べるといふ。

老薔薇の秋芽を二つ出しにけり
薔薇苗や若き日の妻匂ひ立ち
年惜しむ薔薇の根ほぐし土を替へ
薔薇の芽や鐘の音わたる屋上園

一句目「老薔薇」には「四十五年前の結婚記念の薔薇」の前書き。夫婦が結婚記念に植えた薔薇が四十五年にもなる。今年もかわいい秋芽を二つ出す、とひそかに喜ぶ先生である。二句目「薔薇苗」。妻

は若い頃、勾い立つばかりだったなあ、と薔薇の苗を植えながら思う。

三句目。四季折々の薔薇を育てているが、歳末には行く年を惜しみながら、根をほぐし、土を替える、と移植の様子を詠む。四句目は屋上園で育てる薔薇が芽吹き、近くの鐘の音が渡るといふ心のびやかな世界である。

尚夫俳句の自然詠は、一転して静かな境地を見せる。写生の目がよく行き届き、愛唱すべき作品群である。

桜満ち水ひろびろと流れけり
まどかなる月の翳りて牡丹雪
城跡の柄の大樹に囀れり
かたばみの花咲く松の根方かな
かたくりの花に日の透き樹林

一句目「桜満ち」は、大らかな詠みっぷりが大変

いい。二句目「まどかなる」は、雪国の月と牡丹雪を重ね、繊細で大変美しい。さながら、日本画のよう。三句目「城跡」は、金沢城跡の鬱蒼とした植物園だろうか。「稀（たぶ）の大樹」の具体的な表現がいい。四句目「かたばみ」、五句目「かたくり」は、花を愛する人らしく、草花の命を捉えた秀吟であらう。

先生は最近、体調を壊され入院されたが、幸い経過も良いそうで、大変喜ばしい限りである。これからも色彩豊かな薔薇の数々を愛で、句作を楽しまれるようお願いして、私の拙稿を閉じることにした。

平成二十三年初秋

田島和生

紅梅

平成十二年～十四年

一月十日 七十二歳

寒鯛を妻と分かつや誕生日

如月の杉の花芽の口固し

犀川の堰音たかく春浅し

やはらかきちりめんじやこや春の雪

遅き日や俳句の本を積み重ね

向かひ家に婚の荷着きぬ木瓜の花

東山動植物園

藤の花垂れ下がりゐし虎の檻

医王嶺の茫々として冬温し

薔薇の芽を摘みゐて指を痛めけり

雷雨浴び真紅に光る薔薇かな

胃ぐすりを探しあぐねる梅雨の夜

人住まぬ公社に薔薇の高く咲き
鶏頭や青年の顔黒びかり
晩秋や我が咳父に似てきたる

四十五年前の結婚記念の薔薇

老薔薇の秋芽を二つ出しにけり
鬼灯や赤ん坊抱きし母を診る
昼顔やなぎさ通りは波高し
冬蝶の日溜りに舞ふ朝寝かな
枯木立揃つて高し四高跡
悄然と木に鴉みて雪降り
猿丸の大夫の社に初詣
雪解川ひびきて堰を落ちゆけり
紅梅や赤ん坊包み宮参り
残雪の父母の墓拭き清む

犀川河川敷

七十や青きを踏みて淵のぞく

憂きことのやうやく去りてダリア植う
初桜妻即興の琴弾けり
独身の朝寝の窓に揚羽蝶
屋敷町二の橋過ぎて薄暑かな

伏見川堤

羊蹄の花のそよげる高さかな
連休は籠りてをりぬ檜若葉
梅雨明くる托鉢僧の青き顎
路地裏の古き医院に枇杷熟るる
あめんぼの岸よりどつと沼暮るる
三伏や砂地に降りし大鴉
文机の雑然として大西日
暁の戸口に拾ふ落し文

北潟湖に朱の橋

古里に架かりし橋や晩夏光
きちきちと一跳び青き空に消ゆ

鰯雲胸のつかへの去りにけり
秋の夜や灯を消し妻の琴を弾く
山里の鶏頭をのせ野菜売
食後の齒磨く看護婦鰯雲

大学病院近く小立野

曾遊の路地の奥なる金木犀
初時雨華やぐ女流美術展
潮入りの故郷の湖蘆枯るる

犀川

命果て鮭しろじろと流れゆく
冬の蝶我につきたり崖の道
ポインセチア友の悩みを聞いてをり
高空を鳥翔ゆけり冬の雷
新築の家の小さき氷柱かな

百万石通り

電柱を払ひし街や寒鴉

電飾の木々くろぐろと日脚伸ぶ
雪解川中洲沈めて溢れけり
春愁の眼鏡取替ふ老医かな

犀川 桜橋袂

青き踏みまぶしき川面犀星碑

新農道

古里をつらぬく道や麦青む

越中高岡

惜春の鐘を撞きをり二上山
切花に一匹の蜘蛛住みゐたり
足早に緑陰抜ける修道女
大蠅の一匹男搦みけり
夏雀花壇の土をこぼしけり

多くの教え子を戦に送り

慟哭の父を思へり終戦日

里の湖

湖岸に母の植ゑたるカンナ燃ゆ
露草に錆をこぼせり土手の柵
補聴器の耳や秋蚊に襲はるる
瀬祭忌老僧声を囁らしをり
裏路地の一膳飯屋秋灯
新米に塩田の塩ふつて食ぶ
银杏散る黒き御肌の観世音
着ぶくれてごみ袋持つ杖の妻
耳病みし盲の人や冬ざるる
冬川に闘ふ鳶の羽根散れり

老神父の声聖堂に満ち

カステラン神父朗々聖夜弥撒
寒鯉の色動きたり水の底

杜 若

平成十五〜十七年

犀川

友禅の染師杭打つ雪解川

薔薇苗や若き日の妻匂ひ立ち

春眠をゆるされをりし老医かな

投函の乾き氏し音や暮の春

椎落葉喜寿の一会の集ひかな

薫風や口髭白き友来る

新茶汲む病みし話をしみじみと

枇杷の熟れ医院閉づると貼られあり

麦秋や潟野の風は牛にほひ

川沿ひは鏡花の道や合歡の花

梅雨明くる句集「塩田」机上にし

瓦師の赤鬼のごと日焼けたる

のうぜんに碁を打つ音の高さかな

石川、福井県境の加賀柏野

終戦忌山の社に鈴を振る

ネクタイを選ぶ初秋の鏡かな

鰯雲病癒えしと媪くる

小半日、浅草徘徊

仲見世に老いの遊びや秋日和
掌をひらく赤ん坊木の実降る

二十年前、買った壺

賈物の越前古壺吾亦紅

友来る老いて一会の温め酒

友禅の杭に枯葉の流れ寄る

雪催薔薇植ゑ替へし土匂ふ

大雪や托鉢僧の黒き列

雪搔きて指のこはばる老医かな

歓喜天木の芽ほつほつ立ちにけり

朱を散らす鯉みて温む池の水
足弱の妻の剪り来し名残梅
奥卯辰仏舍利塔を雉たてり
声嗶れし女を診るや春深し
菰脱ぎし土塀の春日まぶしかり

敦賀若狭路 三句

砂浄き気比の松原若みどり
砂嘴越えて卯波寄せ来る色ヶ浜
若狭路の植田の先の古刹かな
杜若流れ挟みて咲き初むる
列なして薔薇園巡る車椅子
灯を消すや笛の音冴ゆる夏座敷
炎天やバイクの僧衣へんぽんと
料亭の大樹に掛けし捕虫網
百日紅凡兆句碑を覆ひけり
巫女の留守桔梗色を濃くしたり

露草や病臥の友は手を解かず
こほろぎの闇に屋台の朽ちてゐし

苦痛の中耳炎の患者

急患を診終へて仰ぐ望の月
花蓼や古刹に小さき百度石
山裾に跳ねる仔牛や秋高し
秋深し夫婦の湿布貼り合へる
黄落や目つむり給ふ観世音
小六月ゆらりと太き鯉浮び
雪吊や女庭師の声とほる

三国町

冬の蠅海辺の宿を立ちにけり
茶屋街を流るる川や浮寝鳥
年忘れ酒盃重ねし女医乱れ
年惜しむ薔薇の根ほぐし土を替へ

鶴来 白山比咩神社

しらやまの社の寒の水うまし
除雪車のひびきて来る夜明けかな
風花や修復なりし城櫓
老杉の幹のつやややか春兆す

聖霊病院

草の芽やキリスト像は裸足なる
木蓮の芽吹きて闇に浮びたる
碁敵の石音高し梅の花

小松に妻を待つ

春深し空港に待つ車椅子
桜満ち水ひろびろと流れけり
百千鳥卯辰の山に墓洗ふ
桜吹雪浴びて巨漢のラマの僧
再会や能登のめばるを肴とす

緑陰に空海像の眉太き

十薬の花の鉢置き割烹店

梅雨深む空家となりし両隣

雲の峰伸びしリフトに庭師立つ

炎昼やかすかに揺るる櫛の枝

太き雨湖に刺さりて終戦忌

露天湯や月光浴びて頭三つ

萩咲けり白山麓の旧駅舎

灯を消してながき湯浴みや妻の秋

秋霖と記せしのみの日記かな

膝丈の石の仏や野紺菊

後の月浴びて出前の帰り行く

クラス会で大津へ

義仲寺に入るや芭蕉の露を浴び

竿たたむ女釣師へ鴨の声

医王山より海にかかりし時雨虹
母の忌や母の育てしみかん食ぶ
黄落や教会の鐘鳴りわたる
廃屋の官舎に太き氷柱垂れ
雪吊の松を鳴らせる風の音
雪積んで大き中洲となりにけり
冬桜我が生れし日に咲き溢れ

黄落

平成十八〜二十年

振袖の娘がどつと梅日和

歴史六十年の喫茶「ぼたん」

沈丁やわが青春の茶房閉づ
友眠る墓にひびけり雪解川
妻の試歩斑雪の山に雲一片
まどかなる月の翳りて牡丹雪
剪定の梨の畠に煙立つ

友の訃報相次ぐ 二句

愛惜の日のつづきけり青き踏む
蛍烏賊噛みしめ友を悼みけり

同人会総会

山中や大合唱の春高樓
内灘の海青々と桃の花

城跡の榊の大樹に囀れり
遅き日の船の溢れし港かな
かたばみの花咲く松の根方かな
薔薇園に薔薇剪りをれば喉渴き

飛驒白川郷

合掌の屋根新しや夏の蝶

飛越国境

草茂る野面に積みし関所の碑
人去つて足跡のこる浜豌豆

能美古墳

麦秋や出土の剣錆びに錆び
梅雨出水中洲に雉の声高し
梅雨寒の暁に聞く訃音かな

犀川神社

産土神に川風わたり夏祓

庄川

長梅雨の河口離るる貨物船

墓道にこぼれてゐたり桜の実

秋の薔薇日数をかけて崩れけり

霊水にのどを潤し暮の秋

敗荷に小さきとんぼ縋りをり

冬浜に拾ふ異国の文字の瓶

巖門の磯に漂ふ海鼠突

黄落や炎背負ひし摩崖仏

わが余生いくばくならむ龍の玉

県境の福光街道

雪となる蓮如団子の茶店かな

マジックの女医婉然と年忘れ

高枝に鷹ゐてまぶし河北潟

胴太き鯉のゆらぎや春兆す

咲き満ちて水仙海へ傾けり
鬚男破魔矢の鈴を鳴らしくる
先がけて日当たる一枝梅ひらく
城跡の雑木けぶりて春浅し
赤ん坊の一粒握る追儼豆
如月や川音ひびく雨宝院
あたたかや底を塗らるる漁舟
薔薇の芽や鐘の音わたる屋上園
池の底萍紅く生ひ初むる
松籟や砂丘に延びて苗障子

森本・富樫断層

活断層走る堤や蓬萌ゆ
春昼やピエロとび出す大時計
能登の土付け春筍の届きをり

手取川ダム湖畔

熊談義胡桃の花を仰ぎつつ
柿若葉赤ん坊の髪くろぐろと
谷水の奏でる闇や著莪の花

加賀市山中温泉

湯の町の寂びし吊橋桐の花

井波 本彫りの里

獅子頭彫るや涼しき鑿づかひ

三国町雄島 二句

夏あざみ崖に寄り添ひ蚕の墓
剝落の丹の橋濡らす半夏雨
長梅雨や黒人の喉腫らし来る

林徹先生病む

梅雨の日を見舞ふや師の掌あたたかく
雲の峰サーカスの旗はためけり
炎天や沖に仮泊の貨物船

縞馬の水飲む池や初とんぼ
辞儀深く禅寺出づる秋日傘
初咲きの秋薔薇活けし厨かな
秋晴や屋上園に舞ふ黄蝶
老猫と出合ひて竦む秋の暮

白山麓

山国や無人の店に零余子買ふ
耳鳴りの止まる日のあり冬はじめ
初霰手押車の妻に跳ね
黄落や古美術店の青九谷
雪吊や庭師手練の縄捌き
片足は砂丘にたく冬の虹
冬虹や銭五遺愛の遠眼鏡
観鳥の窓を離れず冬の蠅
冬鴟や牧にころがる草ロール

古九谷の館や大き冬柏

雪霏々と豆腐屋にたつ修行僧

寒晴の東尋坊に背を伸ばす

寒禽や寺に古びし翁句碑

春雪やせきれい走る厨口

鉢提げて黒土匂ふ男くる

小松天満宮

筆塚に捧ぐ古ペン梅白し

加賀市山中温泉

開帳の薬師如来に雪解風

兼六園

霊水の底まで透きて菖蒲の芽

初音すとあかとき妻に揺すらるる

林徹師の死去を悼み

暮れなづむ犀川中洲雉子啼けり

くちづけの三毛と白猫暮の春
かたくりの花に日の透き櫛林
若鮎のひかる魚道や雨宝院
逝く春のそこに犀川徹の句碑
人絶えぬ犀星詩碑や花杏
河川敷薔薇を咲かせて翁かな
溪若葉辰巳用水取水口
花胡桃溪を辿れば水の音
山独活を抱へ谷より大男

市内延命地藏院

濃山吹凡兆の墓石三つ
遅き日や釣糸垂るる船溜り
夏めくや乙女は足の爪も染め
衣更へ行脚の僧の青顎

野田山墓参 二句

万緑や坂道縫うて師の御墓

水かけて御墓めぐれば夏の蝶
うつぎ咲く谷の十戸や蓮如道
岩清水九谷の湯呑並べあり
神門の夕映仰ぎ大茅の輪
青菘や辰巳用水ささ濁り
青胡桃加賀一の宮水迅し
リュック負ひ寺の町ゆく処暑の僧
紅芙蓉母似の声の女将かな
鴟高音補聴の鼓膜つらぬけり
閉ざされし牧舎の空や秋つばめ
実盛の塚とぶらふや鉦叩

泊康夫氏を悼み

黄昏や桐一葉落つ四高跡

手取川

しぶきあげ今生の川鮭のぼる
山国や崖に傾げる残り稲架

折口信夫父子

丈低き山茶花垣や父子の墓
独り身の友に叙勲や帰り花

東尋坊

断崖の石路咲きて順の詩碑
菰掛の新藁にほふ武家屋敷
歳晩の高張明き歓喜天

山茶花

平成二十一〜二十二年

雪解水棚田に溢れ海に落つ
聖堂に蕾こぼるる紫木蓮
磯宮の土手の崩れて露の臺
足弱の妻の手捌き桃の花
厩出し去勢の白馬大地搔く
轉りや松の影置く徹の句碑
塗り替へし大橋映ゆる花杏
木の芽山香華参らす徹の墓
落葉松の新芽のほのと菓学部
喪の家の裏の一畝葱の花
花菖蒲廓格子に太鼓の音

旧高島医院

先達の医院の残り桐の花

万緑へ煙噴き出す登り窯
片陰を裾なびかせて修道女
空耳か亡き父の声遠郭公
蒲の花はるか砂丘に新団地
車椅子試乗の妻に夏の雨

加佐岬

なでしこや灯台見ゆる岬径
一揆跡千屈萩揺るる三の丸
秋夕焼くるくる舞つて鳥の羽根
さねかづら鎌で切りとる髯男
豊年や亀が流れを渡りくる

栗津温泉

湯の町や露にきらめき能舞台
山の柿齧り男の熊談義
用水に網をひろげて松手入
冬はじめ喉に小骨と女かな

山茶花や七尾城址の隠し井戸

神戸 須磨

琴の音や敦盛塚に紅葉散る

冬満月杖つく妻の後に添ひ

冬灯蓮如の御文墨の濃き

雪折の松が枝匂ふ築地堀

大乘寺

鐘一つ拝みて打てり雪解寺

兔追ひし友の訃報や春の雪

柏楨先生を悼み

大柏三寒四温の天寿かな

孫娘留学

外つ国へ雛も入れて旅鞆

媼病む春大根の肩を出し

青き踏む仔牛にをどり耳の札

春雷や師の忌間近き野田の山

春疾風補聴の耳を鳴らしゆく

能登 志賀

原発塔かげろうてをり浜の涯

海見ゆる白き疎林を春日傘

春深し湯浴みの妻の背ナまるき

玫瑰や沖ゆく白き巡視船

薰風や膝折りて食む牧の牛

笹百合や一揆の里の水迅し

初鮎の骨喉にかけ媪かな

義弟急逝

夏霧の流るる砂丘帷して

つまづきてくぐる茅の輪や日照雨

滝風に木天蓼白くきらめけり

炎天や荷を負ふ僧の足速し

金箔工房

工房の金の仏像晩夏光

夜の秋碁敵秘蔵ワイン抜く
売られたり尻豊かなる青瓢
地蔵盆素顔の老妓と法話聞き

一乗谷朝倉氏遺跡

復元の屋敷を歩み秋の声

木場潟

潟の辺に広がり光る蕎麦の花
珊瑚樹の秀にのぼりたる藪枯らし
産土の罇の参道地虫鳴く
小鳥来る四高館のカフェテラス

あとがき

今は亡き林徹先生の勧めで俳句を作り始めたのは七十歳過ぎでした。この度、超晩学の私が八十三歳で句集を発刊できたことはまことに幸運で、初歩から指導いただいた林先生、そして現「雉」主宰の田島和生先生に深く感謝申し上げます。

林先生からは『架橋』『直路』など句集を贈って頂いていましたが、ただ書架に飾るだけで俳句は遠い世界でした。

六十歳になり「遅いぞ」と云われましたが、診療に多忙で断念し、七十歳になり再度の勧誘に俳句を始めることにしました。

まず、月二回、約三十句のファックス通信での「写生」と「主観を抑え、目の前のことを詠む」、に約一年半、添削指導を受けました。しかし、晩学

の古いし脳は季語、漢字を覚えるだけで精いっぱいでした。徹先生も悩まされたことでしょう。よく叱られ、褒められました。

漸く「風」誌と「雉」の投稿を許されたのが平成十二年四月でした。同時に金沢「風」句会に入り柏禎先生はじめ大先輩の指導を受け、俳句の基礎と多様さ、それにいろいろな方たちを知りました。十四年「風」終刊後は三谷道子さん指導の金沢「杏」句会で学びました。

十七年六月、金沢「雉」句会が十五名で発足しました。故・泊康夫先生、山信夫さん、その後二十年からは石黒哲夫氏、太平栄子さん、青木和枝さん、そして句会の皆様のご指導をいただき、厚く御礼申し上げます。特に畏友宮崎修先生は同じ耳鼻科医ですが、林先生とは同級です。俳句は私の一年後から始められ、お互いに切磋琢磨させていただ

ております。

振り返ってみますと、句集には七十二歳から八十二歳までの十一年間、私の 周辺と診療、友人、故郷、趣味の薔薇、そして金沢の景色などを詠んでおります。「雉」大会以外は日帰りの旅が殆どです。句作に挫折することもありましたが、林先生はじめ句友から励ましを受け、詠み続けてきました。二十年三月 恩師林先生が逝去され途方に暮れましたが、後継は田島和生先生と決まり、安堵し句作を続けました。

しかし、近年体力が衰え、老人性難聴も高度となり、句会の聞き取りは介助をしてもらうようになりました。いつまでも句会にご迷惑をお掛けするわけにはと困っています。「雉」誌への投句だけは続けるつもりです。

金沢には林先生のお墓と石路を詠んだ句碑があ

ります。

石路の花言葉短くあたかく

句碑は医院の近くにあり、時折、お伺いし話し掛けていますが、まだまだと先生から励ましを受けています。

田島和生主宰には、林先生逝去の平成二十年五月よりご指導いただいております、今回「雉」掲載誌の拙句五百六十二句から三百三十六句を選んでいただきました。また句集の題名は薔薇作りが趣味であるからと、『薔薇』と決めていただき、深く感謝申し上げます。

最後に編集、出版のお世話をいただいた「文學の森」の方々に厚く御礼を申し上げます。

平成二十三年九月

佐藤尚夫

著者略歴

佐藤尚夫（さとう・ひさお）

昭和三年一月十日 福井県あわら市生まれ

昭和二十五年 金沢医科大学専門部卒

昭和二十六年 金沢大学医学部耳鼻咽喉科教室勤務

昭和三十一年 金沢聖霊病院耳鼻咽喉科医長

昭和四十年 金沢市で耳鼻咽喉科医院開業

平成七年 医院は長男が承継し、診療は週一日（木）

平成十年 俳誌「雉」入会。主宰林徹氏の指導を受ける

平成十二年 「雉」誌に投句始める

平成十七年 「雉」同人

平成二十年 徹師死去により、後継主宰は田島和生氏

俳人協会会員

句集 薔薇（ばら）

発行 平成二十三年十一月十五日

著者 佐藤尚夫

発行者 大山基利

発行所 株式会社 文學の森

ISBN978-4-86173-311-6 C0092